

「なあ」

最近、並んでいて順番を抜かされる
ことがよくある。一昨日は電車で降り
る人を待っていたら後ろの人がすつ
と先に行って座った。先週は立ち位置
が微妙だったのか、レジのところ
でさつと抜かされた。

そんなとき、ちよつといやな気持ち
になるものだ。しかし、権利のための
闘争を繰り広げるほどのことでもない。
そこで、自分の心を静めるときに役
に立つのが「なあ」である。心の中で
「このやろ、抜かしやがった！」など
とは思わないようにする。思考に「な
あ」をつけるのだ。「抜かされたなあ
」と思うのだ。そうするとなんだか
んびりしてきて、「ま、いいか。しかた
ないなあ」という気持ちになるんだ
なあ。

文末の「なあ」は、感じていること
を、ちよつと時間的な幅をもって認識
することを表す終助詞である。例えば、
熱いことを知らずに熱い湯船に入った
ら「熱いー!」と思う。その瞬間には「熱
いなあ」とは思わない。一方、あとで
しみじみと思い出すときには「えらい
熱かったなあ」と思う。また、長く湯
船に浸かっていると、しみじみ熱さを感じ
るのなら「熱くなってきたなあ」と
思う。いずれも、「なあ」をつけると
認識に時間をかけることになっている。
いわゆる詠嘆というのはいかように
とかなあとも思う。「ああ、綺麗な月
だなあ」「いい浜風だなあ」などとい
うように、時間をかけて認識しな
おすことがまさにしみじみとした詠嘆とい
う情意なのである。

というわけで、「なあ」を使ってい
るような感じたり考えたりしていると、
反射的な怒りも苛立ちも押さえられる。
忙しくても余裕が生まれる。一瞬一瞬
を大切に味わうこともできる。

でも、ふと気づいた。なんだか、思
考の速さが鈍化してくるようでもある。
「電車が来たー!」と感じるのではなく、
「電車が来たなあ」と感じる。乗り降
りの混雑を見て「大変だ。乗れなくな
るぞ」ではなく、「混んでいて大変や
なあ。乗れなかったら困るなあ」と思
う。そう思っている内に、目の前が
しゅんとドアが閉まってしまふ。「あ
れれ? 乗れへんかったなあ」……これ
では、後ろの人に先に行かれてしま
うのも、当然、なのかなあ。

早稲田大学教授

森山卓郎 もりやまたくろう